

# 学級経営における集団づくりと個の育成に関する研究 —教師分析の視点から—

川上 知子\* 倉本 哲男\*\*

\*佐賀市立城南中学校

\*\*教職実践講座

## A Study of Group Building and Individual Development in Classroom Management —From View Point of Teacher Analysis—

Tomoko KAWAKAMI\* and Tetsuo KURAMOTO\*\*

*\*Jounan Junior High School, Saga 840-0016, Japan*

*\*\*Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 要 約

多くの教師が、目の前の子どもたちのことのみを論じがちであるが、その教育的背景に、教師の人間性が大きく影響を及ぼしていることを見落としがちである。教師のどんな人間性が、どのように子どもたちに影響を及ぼしているのかを知ることは、教師の教育実践の質を高めるにとどまらず、子ども達への影響においてもよりよい効果をもたらすと考える。これらのことを踏まえ本研究では、一教師の学級経営、特に集団づくりと個の育成における実践の傾向と課題を明らかにするとともに、学級経営において、その教師のもつ人間性がどのような教育的影響を及ぼしているのかを教師の自己分析を踏まえた学級経営構造図の構築によって明らかにする。そして、自己分析の結果を踏まえた学級経営を可視化することは、客観的に自己の実践を振り返ることを可能とし、教師の自己成長を促すものと考えられる。

Keywords : 学級経営, 教師分析, 集団づくり, 個の育成, 学び続ける教師

### 1 研究課題の設定

本研究は、一教師である筆者の学級経営、特に集団づくりと個の育成における傾向と課題を探るとともに、教師のもつ人間性がどのような教育的影響を及ぼしているのかを教師の自己分析を踏まえて明らかにするものである。

学級経営に長年携わっている教師の中に、4月に同じ実態の集団と出会うはずがないにも関わらず、3月になると毎回似たような雰囲気をもつ学級集団になりがちであるという実感をもつものがないだろうか。または、同じ指導案で授業を展開していても、授業者である教師によって授業の雰囲気が異なるということを他者の授業を参観しながら感じたことはないだろうか。一般に教師は、目の前の子どもたちのことのみを論じがちであるが、その教育的背景に、教師の人間性

が大きく影響を及ぼしていることを見落としがちである。教師のどのような人間性が、どのように子どもたちに影響を及ぼしているのかを認識することは、教師の教育実践の質を高めるだけではなく、子どもたちへの影響においてもよりよい効果をもたらすと考える。また、教師が自分のもつ人間性やその影響を認識することが、教師自身の学びや自己成長に反映されるものと期待している。

### 2 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

第1の研究目的は、学級経営に関する理論を整理するとともに、筆者のこれまでの学級経営、特に集団づくりと個の育成における教育実践を振り返り、傾向と課題を探る。それらを踏まえて、理論と実践の融合を

図り、学級経営の振り返りを行うことである。

第2の研究目的は、教師の自己分析を行い、教師のもつ人間性を探ることで、学級経営、特に、集団づくりと個の育成の場面において、どのように影響を及ぼしているのかを考察していくことである。岸田(1987)は、教師の実践的指導力を支えるものの上部構造を「教師の教育的な信念や教授上の知識や技術」、基底で支える下部構造を「子どもから教師への信頼や心情」とし、「この両者が一体化した教育的な人間関係のなかで、教育実践の成果が完全に実を結ぶ」と述べている。このことから、子ども達一人一人の心を育みたいと思うのなら、まずは教師自身が己を知り、自己の如何なる言動がどのように子どもたちに影響を与え、どのような効果をもたらし得るのかを認識しておく価値があると言えよう。教師がまず己を知り自己実現を追究し、「学び続ける姿」の一モデルを示すことは、目の前の子どもたちに夢や目標をもたせることにつながると筆者は考える。よって、本研究では、筆者の自己分析を行い、自己概念を可能な限り明らかにすることで、それらが、学級経営における集団づくり、個の育成の場面でどのような影響を及ぼしているのかを、考察していく。

## (2) 研究の意義

本研究は、以下2点の意義をもつと考える。1点目は、筆者のこれまでの実践を振り返り、理論との意味付けをおこなう。それによってパターン化されつつあった学級経営の課題とよさを見出し、筆者の自己概念を活かした学級経営構造図を構築することにある。その構造図は、本研究における実践上の課題をもとに構築したが、今後の学級経営のあくまで土台を意味するものでもあり、担当する学級のもつ文化と筆者の状況にとりも、多少変化を要することは押さえておきたい。この構造図は、その時の状況に適したものにつくり変えられ、柔軟に対応することが求められる。

研究の意義、2点目は、教師分析を行うことで、実践者のもつ自己概念の存在に踏み込み、実践との影響を考察することにある。教師が自分自身の自己をすべて把握することは難しいことであるが、教師分析を行い、自己の一部を自覚することで、自身が教師として、生徒や教育においてどのように感化しているのかを知り、整理することで、その教育的影響を探り、教育実践の幅が広がることを期待している。

## (3) 研究の方法

まず、筆者のこれまでの実践を振り返り、課題と成果を明らかにする。その課題と教育実践の傾向に適した理論を探り、実践と理論の意味付けをおこなうことで、学級経営構造図を構築する。

さらに、生徒保護者を対象に無記名、記述式による

アンケートを実施し、教師の分析を行う。その結果をもとに分析考察し、筆者の教師としての自己の一部を明らかにし、教育における感化や影響を探ることとする。

## 3 学級経営における集団づくりと個の育成

### (1) 学級経営における先行研究

小学校学級経営事典(1978)・中学校学級経営事典(1972)は、学級経営とは、学校教育目標の実現に向けて学級を効果的に組織し、運営することとしている。その役割を以下の7つの視点でまとめた。

- ①学校教育目標の実現を目指し、学級において育もうとする児童生徒像を明確にして学級指導目標実現のための具体的方策を立案する
- ②学級指導目標の実現を目指し、学校の各種教育計画に従って、学級指導計画、更に担当教科、総合的な学習の時間、道徳及び特別活動の指導計画を立案する。
- ③各種表簿、観察、関係者の話等を通じて、児童生徒の心身の特徴を把握し、望ましい人間関係の中で、児童生徒の健全育成や学校生活の充実が図られるように心がける。
- ④児童生徒一人一人の学力の特徴や傾向、得意教科や不得意教科、つまづきなどの実態を十分に把握し、適切な指導に努める。
- ⑤教室の物的環境の整備と管理に努め、児童生徒が毎日の生活や学習活動をよりよい環境の中で行えるよう心がける。
- ⑥学級を経営する上で必要な事務的な作業を行う。具体的には、学習評価、諸表簿作成などの事務処理を行う。
- ⑦学級経営に関する保護者の理解を促し、連携を深めるために、学級だよりの発行や懇談会、家庭訪問などを行う。

これらは、学級経営をマクロの視点でとらえたときの役割にすぎず、実際は、一人一人の児童生徒に照準をあてたり、集団に照準をあてたり、と一日の中でもレンズの照準を何度も調整する中で、さまざまな課題の短期的解決を図り、教育目標を達成するための役割を果たしていくことになることは押さえておきたい。

また本研究では、上記の①②③を「集団づくり」、④を「個の育成」⑤⑥⑦「環境整備」の3つに分類し、学級経営を2つの側面から捉えることとする。大西(1967)は、著書「学習集団の基礎理論」の中で、『集団づくり』=『学級づくり』+『授業』という捉え方があるのではないかと思われるフシがある」と主張している。このことから、「集団づくり」を生徒一人一人の人間性を伸ばす集団をつくる「学級集団づくり」と、能動的、協同的な学ぶ雰囲気の中で各生徒により

よい効果をもたらすような集団づくりを「学習集団づくり」とし、混乱を避けるために本研究では以下のように整理し、論を展開していく。

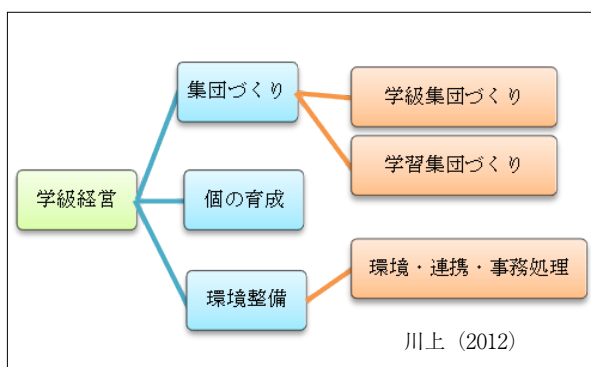


図1 本研究における学級経営

## (2) 中学校における学級経営

中学校においては、教科担任制で授業が展開され、小学校の担任が、1日のほとんどを、担当学級で過ごし、児童を理解するための十分な時間を確保しやすいのに対し、中学校においては、担任の担当教科、道徳、学活、総合の授業で、生徒たちと主に関わりをもつことになる。これは、1日の枠組みで考えたときに、教科によっては授業がない日も当然起こりうることであり、この状況の中で、如何に生徒理解に努め、生徒との信頼関係を築いていくのが中学校の学級経営の大きな鍵となるといえよう。

さらに、全国生活指導研究協議会常任委員会（以下全生研）は、「学級集団づくりは、学級担任一人によってすすめられるものではなく、その学級を直接・間接に指導する教科担任集団や学年教師集団によってもすすめられる」とし、「教科担任集団は、授業運営や学習指導を通して学級集団づくりに参加し、学年教師集団は、学年集団づくりを通して、学級集団づくりに参加している」と述べている。

このことから、中学校においては、生徒理解や生徒指導上の関わりにおける教師集団の連携は、必要不可欠なものであり、教師集団の共同の姿は、生徒たちを感化し得ることをここで押さえておきたい。

また、岸田（1987）は著書「教師と子どもの人間関係～教育実践の基盤」の中で、学級経営において工夫しなければならない中核的な課題を、学級の豊かな人間関係を創造することであると述べ、そのことによって学級の教育を充実する条件整備がなされ、子どもの学力を形成する授業や、人格の陶冶のための訓育が期待されるように発展する基盤が整うことになるとしている。例えば、同じ指導案で授業を展開しても、其々の学級集団のもつ文化があり、その文化によって、発問に対する反応や授業の雰囲気は異なる。極端に言うと、教育的効果ですら、異なると言っても過言ではない。

## 4 実践の傾向を踏まえた理論と実践の融合

### (1) 学級経営における集団づくりと個の育成

#### ～実践者の傾向と課題の一事例

学級経営を振り返るに当たり、4月の時点では、担当する生徒の実態や学級の雰囲気は異なるが、3月に学級が解体される時点で、学級の雰囲気が類似しているという実感を幾度となく味わってきた。このことは恐らく、筆者のみならず、多くの実践者が実感していることだと予想される。この実感の背景にあるものは如何なるものかを検討するに当たって、その教師のもつ自己概念が、生徒及び学級を感化しているのではないかと推測した。そこで、筆者のこれまでの集団づくりと個の育成における実践の傾向を、当時の指導教官と勤務校校長、同僚との間主観で、筆者の実践の傾向と課題をまとめた。

これまでの実践を振り返ってみると、目の前の課題に対し、熟考して取り組むというより、瞬時に対応することが求められる現状から、直感による実践、経験から学んだ実践を反復して行ってきたというのが現状であった。そこで、筆者の実践を理論との意味付けを行うことで、筆者の実践の傾向と課題を整理し（図2）、学級経営の理論枠を構築することとした。

集団づくり	個の育成
<ul style="list-style-type: none"> <li>個の育成における取組みは、意識して実践できているが、集団づくりにおける意識が低いのではないか。道徳学活において、教科と比べて、計画的な実施ができていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個への対応に関して、生徒の変化を敏感に感じ取り、丁寧な対応ができています。「安心」をもたらす関わりができていますが、「たくましい生徒」の育成における手立てが不足している。</li> </ul>

図2 教育実践の課題と傾向

筆者の課題と傾向を踏まえ、集団づくりには、全生研の理論、個の理解、個の育成においては社会科の初志をつらぬく会の理論、安心を土壌にした環境づくりにおいては、ユニバーサルデザインの理論を用いて、実践との融合を図ることとした。

### (2) 全国生活指導研究協議会常任委員会における「自立」「共同」「自治」の集団づくり

協力の場面は意識して仕組むことが多かった筆者であったが、集団づくりの視点による自治の取組みが不足しているという大きな課題に対して、実践の意識付けもねらいの一つとしながら、全生研の集団づくりの理論を用いることとした。

全生研は、「現代の子ども達の人格発達の危機が進行している」という問題意識を早期から提言してきた。その危機の進行の要因を、「1960年代からの高度成長政策にある」とし、「日本の経済社会、文化の基盤を激変させ、地域・家庭の教育力を衰退させると同時に、

能力主義教育を高じさせ、その結果、子どもたちの人格発達の疎外状況は深まり、さまざまな非行・問題行動が多発することとなった」と警鐘を鳴らし続けてきた。こういった子どもの非行・問題行動は、一段と深刻さを増し、陰湿・凄惨さを増しつつ、学校教育においても、家庭との連携にとどまらず、福祉、医療など、さまざまな方面での連携を要し、それぞれの対応は多岐にわたる。

このことから全生研では、「子どもたちの手で民主的な集団をつくりあげさせ、その過程で人間としての自治能力と自覚を育てようとする『集団づくり』は、不可欠な実践課題といえる」とし、今日の子どもたちに民主社会の主権者として生き抜くためのちからを獲得させるには、この「集団づくり」にこそ展望の拠点があると述べ、「集団づくり」を「自立」「共同」「自治」の理論で整理した。そして、「自立」「共同」「自治」の関係性を。「自立」と「共同」の発展なしには、生活と学習の民主的共同化を追求する「自治」をつくりだすことはできないと同時に、そのような「自治」なしには、「自立」と「共同」を発展させることもできない。つまり、「自立」と「共同」が「自治」を生み出し、「自治」が「自立」と「共同」を発展させる関係にあるとしている。この関係性において3つのどれが欠けても成立することはなく、バランスよく機能することが不可欠であるといえよう。そして、生徒だけに限らず、教師自身も同じ人間としてまずは生徒と向き合うことも大切だと考える。

### (3) 社会科の初志をつらぬく会による子ども理解

筆者の実践の傾向を視ると、個への対応は意識して行ってきたものの、直感によるものに過ぎない現状があった。これまでの実践と理論を融合することで、実践の理論による意味付けを行うこととした。

「社会科の初志をつらぬく会」綱領によると、「社会科の初志をつらぬく会」は、日本の教育政策が系統主義の知識教育、徳目主義の道徳教育に大きく転換したことを批判し、1958年（昭和33年）に発足された。その背景に、その子にふさわしく個を確立していくことが阻害されるという考えがある。また、1947年（昭和22年）に新設された社会科の初志は、新しい民主的な社会を主体的に創造する人間は子どもの切実な問題解決を核心とする学習によってこそ育つという考えにもとづいている。そのような背景をもつ社会科の初志をつらぬく会において、子ども理解の方法のひとつとしてカルテが用いられている。上田（1976）によれば、カルテは静岡市の安藤小学校の研究実践から生まれ、カルテの創造と中核を担ってきたとし、あらゆる医師がカルテによって患者に治療を施すように、教師もまたカルテによって一人一人の子どもを生かそうとすることは至極当然のことであると述べている。その安藤小

学校の実践をまとめた一冊がカルテの生きる授業～国語を中心に、であるが、この本の著書でもある戸崎、石野、渡辺（1976）は、カルテをとり続けて得た実感を以下のように述べている。

- ①カルテをとって、子どもを見つめることを続けていくと、授業の中で生かそうとした最初の姿勢はむしろ消え、子どもから目が離れなくなってしまう。
- ②カルテをとりながら、子どもの背景がわかっていると、その子らしさが凝縮しているその発言の重みに、興味をそそられる。
- ③子どもが自らの力で伸びていることを、カルテによって実感することができる。
- ④教師の予想を大きく上回って、ある日突然に、カルテがはげしく生きる。

このことから、授業に生かすためのカルテの意味合いだけではなく、カルテをつけることで、その子の背景が見え、授業の発言の中にも、その子の暮らしが見え始め、個の理解を深めることができると考える。

### (4) 問題解決学習における個の育成

筆者の実践上の課題の一つ、生徒のたくましさの育成において、上田薫が唱える問題解決学習の哲学は、今後、目指すべく実践への示唆を与えた。上田は「知識の質」にこだわりをもち、教師が授業の中で教える「知識」は、学習者である子どもたちの「既存の知識」とからみあうだけの粘着力をもつべきだと述べている。では、「粘着力のある知識」を子どもたちに教授するには、教師はどのような教材、題材を選択すべきか。ここで、上田は「社会科教材とその性格」について以下のように述べている。社会科の教材は、「子どもの生活面に無数に存在する具体的な内容であると考えられ、その教材の中で、子どもが自分の直面する問題を発見し、それを解決する道程において、その道程をとりかこみ、基盤を形づくり、あるいは、それを成立させるものとしてとりあげることができる生きた教材である」とした。さらに、社会科の教材は、1つ目にその子ども自身の問題解決と有機的なつながりをもつことを必要とし、2つ目は、子どもの能力に応じて必然的に限定される運命をもつ。よって、「社会科は、生活面のあらゆるものを教材にできるといいながらも、子どもの能力、家庭環境や、その時の状況によって、教材として困難なもの適切でないものが存在することは否めない」とした。これまで述べたことは、社会科に限ったことではなく、他の教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などにも適用できる。本研究では、子どもたちの置かれている家庭環境を一番に配慮しながら、特別活動、道徳、または普段の生活の中で、可能な限り、子どもたちにとって身近な題材を取り上げ、子ども達自身の問題解決力を育むことに意識して取り組むこととする。

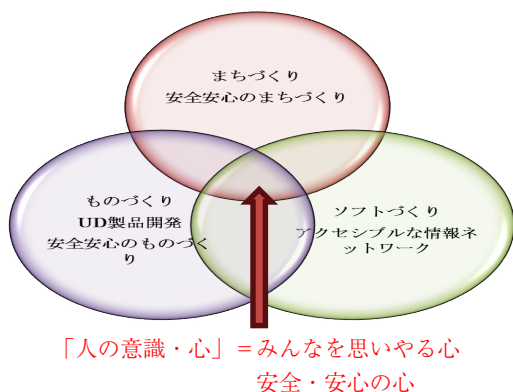
### (5) 学級経営のユニバーサルデザイン化

通常学級に在籍する児童生徒のうち6.5%が学習面又は行動面で著しい困難を示すというアンケート調査の結果がある(文部科学省, 2012)。この6.5%に属さない児童生徒の中にも、家庭や学校に対する不適応から、様々な形で問題行動を示す生徒がいる。このことから、発達障がいの有無に関わらず、通常学級に在籍する、個別の支援を要する児童生徒は、少なくないと言っても過言ではない。そのような状況において、どの児童生徒にとっても、まずは学級が一番の安心できる居場所である必要があると考える。この考えとロン・メイス(1985)が発案したユニバーサルデザイン(以下UD)の理論との融合を行い、学級経営のUD化を検討していくこととする。

今、私たちの身の回りには、UDに基づく、町づくり、ものづくり、情報があふれている。バリアフリーが、特別なニーズをもった方のための障壁を取り除くという発想であったのに対し、最初から「障がいの有無、性別、国籍問わず、できるだけたくさんの人にとって、より利用しやすいものをつくろう」というものがUDである。そして、今よりできるだけ多くの人にとって利用しやすいものを目指し、日々、それぞれの分野で改善が重ねられている。

福祉の視点からは安藤(2011)、バリアフリーとの違いに触れた川内(2001)や建築におけるユニバーサルデザインを整理した梶本(2002)、ユニバーサルデザイン研究会(2009)は、人間工学とユニバーサルデザインとの関連を述べている。このように、ロン・メイス(1985)が、土台となる7原則を打ち出し、それを様々な立場の人が訳し、それぞれの分野で活用されている現状にある。

ここで、学級という空間での活用を考えてみたい。1つの学級の中にも、特別支援を要する生徒、車いすを利用している生徒、目には見えないさまざまな事情を抱えている生徒、身体面、精神面においてなんらかの手立てを要する生徒が在籍しており、その抱える状況手立ても多岐にわたってきているといえよう。このことから、あらゆる生徒にとって、学級が安心できる空



松尾(2011)

間で、自分を発揮し、周りも大切にできる空間となることが求められる。松尾(2011)は、それぞれの分野でUDの考え方をういられているが、それぞれの分野での必要不可欠なものとして「人の意識・心」と主張した。

これまでの先行研究を踏まえ、本研究では「学級経営のUD化」と称し、7原則を以下のようにまとめた。

- ① すべての生徒が差別されない
- ② 自分の考えを自由に表現しやすい(わがままとの差別化)
- ③ 子ども達への指示は簡潔にわかりやすく
- ④ 授業における理解を促すさまざまな手立て
- ⑤ 間違いに対して寛容な雰囲気づくり
- ⑥ 援助を求めやすい雰囲気づくり
- ⑦ 学級掲示物の充実

(限られた空間を活かして、生徒たちの目標、アイデア、活動状況等を掲示)

これらを踏まえ、学級経営の環境的側面と情緒的な側面においてUD化を図ることで、まずは生徒たちの学校に対する「安心」の土壌を築き、それを前提として、集団づくりやたくましい生徒の育成を目指し、実践を行うこととした。

### (6) 学級経営構造図

これまでの集団づくりと個の育成の理論を整理し、筆者の実践の傾向を踏まえた学級経営構造図を作成し、可視化することとした。

これは、他の教師においても転用可能な理論を含むものと解釈している。多くの教師は、無意識に経験から自己の理論を生みだし、実践しているといっても過言ではない。其々の教員の課題に応じた理論を基に同様な学級経営構造図が存在し、自身で構築する中で、

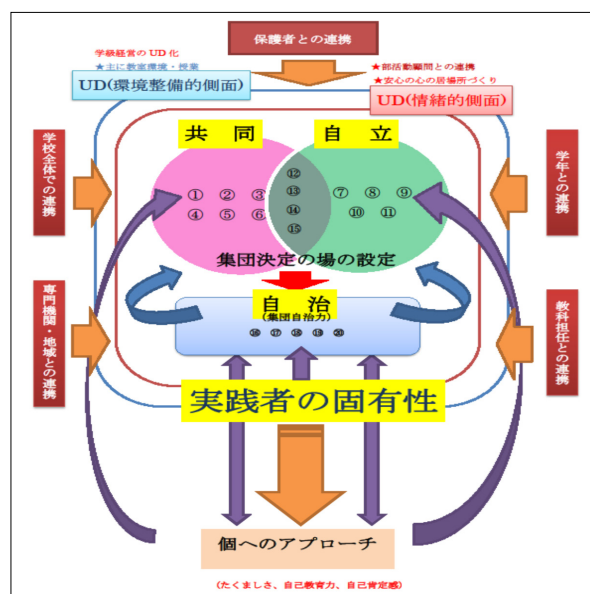


図3 学級経営構造図一例(川上, 2013)

理論と実践の融合を教師自身が実感することができ、教師の成長を促すために有効なものになり得ると期待している。図3は、筆者の課題と傾向を踏まえた、学級経営を可視化したものである。

## 5 教師分析において抽出された自己概念

### (1) アンケートの方法

①実践者に関するアンケート分析～ワードマイナーによる自己概念の抽出

記述式のアンケートを無記名により下記の生徒と保護者を対象に実施した。

期 日	対 象	回収人数
H24年6月	担当学級	31
H24年6月	教科担任学級	43
H24年6月	他学年教科担任学級	38
H24年7月末～	担当学級保護者	22

※アンケート期日：生徒は6月中旬～7月上旬、保護者は7月下旬からの家庭訪問時に依頼  
アンケート回収：133名（全154名）  
〈アンケート項目〉無記名、記述式

- ①「川上先生は、どんな先生ですか」
- ②「川上先生は、一人一人にどんな風に関わっていると思いますか」
- ③「川上先生は、どんな性格だと分析しますか」

これららのアンケートを回収した133名のアンケートをワードマイナーによって処理し、自己概念を抽出する。また、頻出語や気になる回答については、KJ法により、さらに詳しく分析を行うこととした。資料1は、①の記述結果を処理したものであり、強い関連のあるものを同じ色で示し、カテゴリー分類を行った。

	クラスター1 (他学年)	クラスター2 (学年)	クラスター3 (クラス・学年)	クラスター4 (クラス・学年)	クラスター5	クラスター6 (保護者)	クラスター7
1	おもしろい	しゃべり	みんな	一言	一生懸命	一緒	まっすぐ
2	おもしろく	わかり	何事	上手い	何	心	経験
3	クラス	ポジティブ	元気	常	先生かな	人	子ども
4	教え方	自分	言葉	努力	前		時々
5	字	授業	生徒	熱血	熱血先生		身体心配
6	上手	笑顔	積極的	熱心			対応
7	真剣	情熱的	素敵	明る			達
8	数学	先生	平等				部分
9	説明	熱く					方
10	丁寧	話					

資料1 各クラスターにおけるキーワード

例えば、「真剣」「情熱的」「熱く」「元気」「積極的」「熱血」「熱心」「一生懸命」「熱血先生」を同じカテゴリーに属するとみなし、自己概念の一つとして「熱心」とコードを命名した。

以下同様に、自己概念を抽出していくと、①の質問結果からは、「平等」「丁寧」「向上心」「熱心」の4つの概念が抽出された。その他の②、③の質問結果からも同様に抽出を行った。

さらに、アンケートの頻出後「しつこい」と、筆者の自己概念を裏付ける表現「他の先生と違う」のことばに関して、さらに学級の生徒に以下の項目で無記名による記述式のアンケートを実施した。

- ①「どういうときに（またはどういう部分を）しつこいと感じますか」
- ②「どんなときに、（またはどういう部分が）他の先生と違うと感じますか」

これら2つの結果をKJ法を用いて、筆者の自己概念についての考察を行った。②に関して、他の教師との違いを述べる際には、筆者の主観が、データ分析に影響を与えないよう、生徒たちの記述の表現を用いることとする。結果、自己概念の15種を抽出した。そして、これらが個、集団、授業の場で実際にどのように影響を及ぼしているのかを、教育学研究者9名によるディスコース分析を行い、さらに考察を深め、以下の19種類の自己概念を抽出、整理した。(図4)



図4 自己概念を踏まえた集団づくりと個の育成

## 6 研究の成果と課題

2012年8月の中教審答申で、「学び続ける教員像」が明確に打ち出された。このことに関して日本教師教育学会では、「2012年答申は、教員が『学び続ける』ことができない現状認識に立ち、その主たる要因を教員個人に帰すのではなく、環境整備に求めている」と述べている。授業レベルでの学びは、研究授業等の参観、研究協議等で補えたとしても、教育的課題が多様化する今、生徒指導上の課題も山積している。そのような状況の中で、「教師教育」の機会がすべての教員に施され得るのか、教師の資質向上をどのように具現化していくのかは、大きな課題と言ってよい。

筆者は、修論を通して、自身のもつ「自己概念」の一部を明らかにし、自己概念を踏まえた学級経営構造図(図5)を構築したことで、客観的に自己の実践を振

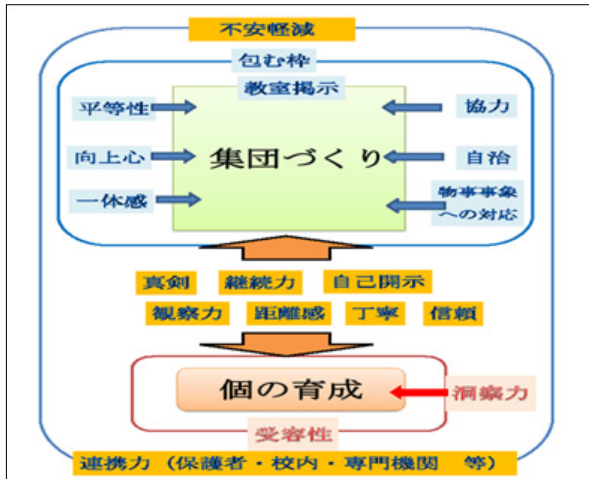


図5 自己概念を踏まえた学級経営構造図

り返ることが可能となり、筆者自身の実践の捉え方、教育課題に対する対処法が明確になった。このことから、筆者だけではなく、他の教師にとっても、その教師独自の自己概念が存在し、それを活かした教育実践が存在すると推測できる。教師の成長に関しては、教師自身が自分を知り、自身の実践の傾向を自覚することは、必要不可欠であると考え。しかしながら、教師における「自己分析」を安易に推奨することは難しい。ここでは述べていない、自己分析に伴う痛みが少なからず存在するからである。本研究における課題は、心に負担をかけ過ぎないような教師分析の方法、または教師が自己を認識できるよりよい方法の検討にある。そして、本研究で明らかにしたのは、教師の一部の自己概念に過ぎない。

また、本研究で参考にした集団づくりや個の育成の理論は、ほんの一部に過ぎず、その教師に合った理論が他に存在することは言うまでもない。集団づくりと個の育成に関する理論の組み合わせは、教師の数だけ存在すると考え、今後それぞれにおける理論の整理を深めていくことが求められよう。

本稿は、展望的な理論的枠組みを論じる点に特徴があり、実証部分の詳細は論述できていないが、自身の実践の振り返りから端を発し、教師分析を行い、自己概念を反映させた学級経営構造図を可視化したことが第一義的な研究価値である。次に、自己の自己概念との関連から、実践の傾向を自覚できるだけでなく、それを他の教師に伝えることで、その教師にも固有の学級経営構造図があることを理解する具体的手立てとなり得る。自身が成長していくことだけでなく、後輩教師を育成することが求められるミドルリーダーにとっても、本研究の方法論は、転用可能な有効性を持つものと考察できよう。

## 引用・参考文献

- 1) 岸田元美 「教師と子どもの人間関係～教育実践の基盤」教育開発研究所 1987
- 2) 全生研常任委員会編 「新版 学級集団づくり入門 中学校」明治図書 1991
- 3) 全生研常任委員会編 「新版 学級集団づくり入門 小学校」明治図書 1990
- 4) 大西忠治 「学習集団の基礎理論」明治図書 1967
- 5) 監修上田薫 「カルテの生きる授業～国語を中心に」黎明書房 1976 p 11-20
- 6) 文部科学省 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」 2012
- 7) 「図説小学校学級経営事典改訂新版」教育技術研究所 1978
- 8) 「中学校学級経営事典」教育技術研究所 1972
- 9) ロン・メイス  
[http://www.udit.jp/report/ud\\_about/ronmace.html](http://www.udit.jp/report/ud_about/ronmace.html) 1985
- 10) 安藤千賀 「UD社会—3・11が問いかけるもの」リベルタ出版 2011
- 11) 川内美彦 「ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ」学芸出版社 2001 p 112-113
- 12) 梶本久夫監修 「ユニバーサルデザインの考え方—建築・都市・プロダクトデザイン」丸善株式会社 2002
- 13) ユニバーサルデザイン研究会 「人間工学とユニバーサルデザイン～ユーザビリティ・アクセシビリティ中心・ものづくりマニュアル」日本興業出版 2009 p 4
- 14) 松尾清美 (佐賀大学医学部) による、嬉野市主催 ユニバーサルデザイン啓発の講演スライド 2011
- 15) 文部科学省 「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (中教審答申)」2012年8月

(2015年9月24日受理)